慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	配役なき脚本 : 和歌山県東牟婁郡古座町における「河内祭」調査中間報告
Sub Title	Whose role is it anyway? : a report of a festival in Wakayama Prefecture
Author	梅屋, 潔(Umeya, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.39 (1994.) ,p.45- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000039-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

配役なき脚本: 和歌山県東牟婁郡古座町における「河内祭」調査中間報告

Whose role is it anyway?: A Report of a Festival in *Wakayama* Prefecture.

梅　屋　　潔*

Kiyoshi Umeya

The aim of this article is to describe an aspect of professional fishermen's work in their certain ritual (they are called *okitto*, literally meaning men in the offing, on the contrary, those who engage the occupation except for fishing industory are called *okado* meaning men on the land), *Kouchisai* in *Wakayama* prefecture. Without any verbal communication, especially about schedule and role (division of labour), their ritual is performed correctly in detail. And, they seem not to be interested in knowledge concerning why to do a certain conduct, or who has to do such a practice taking responsibility, but in how to do certain ceremonial action precisely, and in what to do as a process of rite appropriately. They say "Utterly I don't know why we have to perform like this, but I heard the ways of these practices were ruled long ago, after the battle between *Heishi* and *Genji*, the end of *Heian* era. We've just conducted by rule and will do according to this tradition." In contrast, in spite of their emphasis upon interest in authenticity, I stress that the role and division of labour in the rites seem to be terribly slovenly. The chief of the association of fishermen, which was age group, said, "who has time to spare is to work." The discourse shows us their ignorance of division of labour. Gilbert Ryle asserted the distinction between "knowing that" and "knowing how", which has been cited by many philosophers. Though the analysis of conversation, which provides us with an epistemology, and leads us to be able to comprehend the process of constructive everyday reality extensively, their tendency to practice without "knowing that" including the knowledge related to division of labour, and adherence to "knowing how" pertain to the way of appropriate performance. These feature of conduct "taken for granted" in their ritual force us take these tendencies for the rule of conduct of them, and absolutely, let them not to present a question like "Whose role is it anyway?" for their indifference to role to a considerable extent, as a rule.

I. はじめに

和歌山県東牟婁郡の古座川流域では毎年河内祭とよばれる盛大な舟祭りが行われる。古座川河口より3キロほど上ったところにあるコッタマ・コオッタマ（河内様）と呼ばれる御神体（清暑島という島そのものが御神体である。一枚岩であるといわれる）を巡って，その近隣の5つの地区が様々な形の儀礼を独自に行う祭礼である。その全体的な構成および儀礼の次第については，デェヴィス（1978），桜井（1982），石橋・中西・中西（1988）などで報告され，分析が試みられている。本稿は，古座区の「オキット」と呼ばれる漁師方の若者組である「勇進会」[2] における祭礼の作業を執り行なう際にあらわれるエートスについて素描することを目的としている。祭礼に参加する祭祀集団のミクロな特徴に注目し，記述するために，近年モアマン（Moerman 1988），ザイトリン

* 社会学研究科社会学専攻修士課程（文化人類学，民族誌論，象徴論）

(Zeitlyn 1990) その他[3] が提唱する過程を重視し，会話の分析 (conversation analysis) などを含んだ分析方法を採用する。「オキット」は「沖の人」であり，古座区で一般に漁師をさす。それに対し，古座区でサービス業，卸・小売業，製造業など，漁業以外を生業とするものを「オカド」(陸人)[4]と呼ぶ。極めて長い対立の歴史を持っている両者はそれぞれ対立する若者組をもちながら，まったく異なった形態で一つの祭礼を執り行なっている。河内祭には，古座区からはオキットを構成員とする勇進会，オカドによって構成される青年会が参加しているのである。

オキットとオカドは，経済的には互いに依存する関係でありながら排他的な関係を持つなど，若干両義的な繋がりを持っている。本稿で扱うのは，そのうちのオキットが祭礼においてさまざまな作業をすすめてゆくひとつのスタイルの記述である。

II. 調査地の概要

和歌山県東牟婁郡古座町は，紀伊半島の南端部東側に位置しており，その南側が太平洋に面している。1993 年 4 月現在で人口は 6525 人，古座区の人口は，988 人である。人口流出も年々深刻化しているという (山田 1994: 10-12)。古座区は古来捕鯨の漁業基地として発展してきたが，現在も「漁師どこ」と自らも認識しているような地域であり，生業も漁業関係に大きく偏っている (中西 1987: 40-2)。近隣の古座町田原・荒船地区で見られるような半農半漁の形態はこの地区には見られないばかりか，むしろ農業に関して忌避的な態度を持っているとさえいえる (中西 1987: 9, 山田 1994: 16-7)。

古座区は，上ノ丁，中ノ丁，下ノ丁といった下位区分を持った組織であり，それぞれカミヂ，ナカンチョ，シモヂと言い習わされている。オキットは主にシモヂに集中して住んでおり，シモヂといえば漁民の住む所である，との意識は強く共有されている。近年は区の居住地区の後背地にある上野山に新興住宅地が成立し，そこに転居するものも多い。区内にはシモヂに曹洞宗古城山青源寺が，ナカンチョに浄土宗阿弥陀寺，カミヂに浄土真宗善照寺があり，区内の人々はこのいずれかの寺の檀家になっている (山田 1994: 18-20)。シモヂは古座神社があり，オキットはこの神社の氏子となっている。古座神社は，コッタマと並んで祭礼においてハライなど重要な儀礼が行われる場であり，後に触れるショウロウの籠る場でもある。

区の行事の中で重要なものは，古座区を含む 5 地区を統括する河内祭をはじめ，旧 8 月の八幡祭，盆の灯籠送りなどがあるが，対外的なこの若者組の儀礼的特権 (デェヴィス 1978) を示すという意味でも最も重要なのが河内祭なのである[5]。仮りに 70 年代のリーチらの議論に沿って儀礼がなんらかのメッセージを持っていると考えるならば，これはオキットたちの儀礼性 (rituality) を表現しているのである (Leach 1976: 37-45)。

III. 勇進会の儀礼の過程

河内祭の記述にはいくつかの困難が伴う。河内祭には，生業形態のまったく異なる祭祀集団[6] が 6 つ参加しており，同時に複数の祭祀集団によって執り行なわれる複合的儀礼がいくつか存在するにも関わらず，さらに，それぞれが祭礼の執行に関して連合，協力，接触をほとんどまったくといってよいほど持っていない (石橋・中西・中西 1988: 168-9) 点に第一の特徴がある。裏返していえば，これは記述しようとする者に異常な困難を要求するものなのである。古座区では，勇進会と青年会という二つの祭祀集団が参加しているが，お互いのほかは高池下部地区の祭祀集団である「互盟社」が極めて希に話題に上るだけ[7] であり，実際に祭りを運営している当事者ですら，どれだけの祭祀集団が参加しているか知らない節がある[8]。全体的把握を試みるデェヴィス (1978), 桜井 (1982), 石橋・中西・中西 (1988) にしても，松下 (1992) にしても，全体的なラフ・デッサンには成功しているものの，細部にいくつか満たされない点があるのも事実である。というのも，例えば，デェヴィスは漁師集団である「勇進会」が儀礼的特権を有していると説くならば，なぜその儀礼性 (rituality) の現れている度合いの強いといわれている (あるオキットの言である)「夜籠り」についての記述が全く欠けているのか。石橋・中西・中西 (1988) の記述にしても，部分的に不十分，あるいは欠けているといった感は否めない。しかし，これらは，必ずしも彼等の力量に帰せられるものではなく，むしろ「祭礼の重層的構成」(石橋・中西・中西 1988) によるところが多いと思われるのである。

以上のような認識を踏まえて，本稿では，ネイティヴですら把握できない儀礼の過程全体を追うことはひとまず断念し，まず古座区の漁師方の若者組である「勇進会」に限ってその儀礼の過程および，準備も含めてかれらの作業の進め方を描写する。

1. 歌合わせ

祭礼の最中，勇進会にとって集会場，連絡先などとして極めて重要な役割を担う「勇進会館」[9]には，タイムテ

ーブルはなく，わずかに入り口近くに勇進会の象徴ともいえる御舟（みふね）の乗組員の名簿，「7 月祭典勇進会乗組員名簿」が貼り付けてあるのみである。儀礼の次第は会員それぞれの頭の中に入っているのである。

祭礼の一月ほど前，「河内会」の人々が御舟歌（後述）の練習を始める頃，勇進会の会員のうち「若い衆」と呼ばれる者たちは漁の合間を縫ってそれぞれが乗る御舟の飾りの準備をする。竹を割いて吹き流しをつくったり，壊れた幟の竿を作り直したりするのが主な作業である。上・中・下，三隻の御舟にはそれぞれ対応するヤドがあり，地区がある。寄進（後述）の礼として町の溝そうじをするのもこのころのことである。上・中・下それぞれ独自に作業をするので，原理的にはそれぞれの舟に対応する若い衆は最低一人ずついなければならない。

7 月 21 日には花と呼ばれる寄付金（商売をしている家だけの寄付）を集め，これが済むと寄進という「軒並み」つまり勇進会の担当地区内すべてから集める寄付金を集める。

7 月 22 日，「沖止め」[10]，といい，祭礼に参加する「勇進会」の成員の出漁が禁止される。1993 年は，ヒガマエ（三親等以内の近親者の死のケガレ：かつては親の死の場合は 50 日間，祖父母は 30 日間，オジ，オバは 20 日間，兄弟，姉妹は 20 日間，オイ，メイ，イトコは 3 日間であったが，熊野の本宮に問い合わせた結果短縮され，現在では父母・夫・妻・子は 10 日間，7 歳未満の子・祖父母・孫・兄弟姉妹は 5 日間，曾祖父母・曾孫・甥・姪・叔父・叔母は 2 日，それ以上遠い場合 1 日とされた。）[11] の者に対するハライが古座神社において行われたが，例年 23 日に行うはずのものをオキットらの希望で前日におこなったという。昼過ぎに会員のひとりがバケツを持って「潮くみ」にゆく。その夜，「歌合わせ」という，御舟が水上をすすむ間に歌われる御舟歌[12]の最後の儀礼的リハーサルを行うため，ヤドに提灯その他の飾り付けを行う。それが終わると，7 時にシショウ（師匠）と呼ばれる「河内会」[13]の人々が上，中，下のヤド[14]に集まるのを待つ。かつてはそれぞれのヤドの構成員は，上・中・下それぞれの地区に住んでいる者であったが，現在は大きく崩れている。お互いの対立もあったらしく，現在でも別のヤド・御舟に属する仕事を手伝うことは無い。ヤドは，基本的には毎年同じ家であるが，その家に不幸がありヒガマエになると，別の家がヤドとなる。ヤドにはそれぞれ柄の異なるのぼりが立てられている。ヤドにシショウが集まるまでは，勇進会の会員はシモヂのヤドも兼ねている勇進会館に詰めている。この日まで約一月間，河内会（御舟歌保存会）は独自に練習を重ねてきているのである。

ここで注目すべき点は勇進会会長[15]以外は，詰めている顔ぶれが一定していないことである。会長によれば「テェノスイトルモン」が詰めていればよいのであり，とくに誰がいなければならないということはない。因みに，この御舟歌は，上，中，下それぞれが異なった役割を持つ。後に触れる「夜籠り」で歌う歌が，それぞれ異なっているのである。歌合わせの折りには，時間の都合上「入り舟式」で共通して歌われる「出し」「皇帝」のみが歌われ，「夜籠り」でそれぞれ歌われる上の「おやまくどき」，中の「あずま」，下の「やしま」は省略される。

彼等のいうには，独特の符牒と，和音など様々な条件によって，26，7 歳で習い始めたとしても 65 歳で完全に歌い得るようになればよいほうだ，という。

歌っている最中にも，時折休んで，砂糖を溶かし込んだ氷水やお神酒で喉をしめらせることが許されている。リハーサルが終わると，酒と刺身，ダンゴ（おはぎのこと）が供され，三々五々家路に就くシショウを見届けてから，勇進会の会員の宴がはじまることもある。

2. 評定

23 日は早朝 6 時からスギシバツケが行われる。ある場所[16]から前日取ってきておいた杉の小枝を割った竹の間に挟み，御舟の上方四隅に取り付ける作業である。オキット達は様々な縛り方を知っているが，このときに選ぶべき縛り方も決まっているようである。それが済むと，上，中，下それぞれの前の船着き場に舟を移動する。そしてヤドの付近に幟などの飾りを組み立てておいておき，明日早朝御舟にとりつける作業に備えるのである。ところが，1993 年は台風 4 号の直撃でスギシバツケの以降行事は中断を余儀なくされ，数年ぶりの「評定」（天候不順などの際，予定を決める会合，「総会」ともいわれる）[17] が開かれた。24 日は満場一致で中止と決定，次の 25 日朝の評定に決断は延期された。貴重な資料なので詳しく記述すると，25 日午前 7 時すぎに行われた「評定」の様子は，次のようなものであった。「評定」の会場となった勇進会館には午前 6 時まえから会長がおり，会員も 6 時 30 分には 8 名ほど集まって天気予報をテレビで見ながら議論をしていたが，「評定」そのものは区長，古座神社宮司，氏子総代，青年会会長の到着をまって 7 時 16 分に始められた。

勇進会会長　「天気のほうはこんぐらいやけど/：風は強いところやけどよ，雨もボチーボチとある……とはおもったんやけどよ/：まあオカドのひともあることやし意

見ちいと……だしてもらおかのう」(14 秒沈黙))「××××」
勇進会会長「××し一青年会のほうは……あのはやいほうがええんやろ?」/:
青年会会長「おお……しょやけどね」
勇進会会員A「で区一のほうはどういう対策になったん××よ一」
区　　長「もう勇進会信用してせなんだらあかんやろ，いうことにうちあわせてきたんだけどよ/: もう降ってしまったからよ×××××××××」
勇進会会員B「師匠があかんちゃ倒れたらおろさんならん//ねん××」
勇進会会員C「××××」((以降 32 秒聞き取り不能))
区　　長「決定，ここで勇進会がやるゆうてきたらよ//もう即はかるように」
勇進会会長「けってい……はうちのほうは××やから決定出せゆわれてもね……まあ//」
勇進会会員D「まあゆうたのうやるゆうて昼からやろうおもたら支度で二時間あったら//えーかざりつけるけどのう」
勇進会会長「やれるけど/: なにか用意するゆうたらうちのほうがええだろおもてのう/: まあだいたいよう意見/: だしてもらえたら/: はた回りの手前もある……あることやしよう」
勇進会会員D「まあどういうもんか//のう」
勇進会会員E「まあ昼までみてみよや×なこたあ」
勇進会会員F「ひるまでのう……××じゃそれでのう，あかんかたらもう/: 翌日」
勇進会会員G「いっしょによう×××」
勇進会会員E「あんなもなあおまえかんたん//に×××」
勇進会会員F「×××//××」
勇進会会員D「勇進会だけの祭りやないんやからよう」
勇進会会員E「まあてんまとかそんなんはレッカーで×××」
((以下ほぼ聞き取り不可能なほどさまざまな話者が様々な語りを 29 秒，風，雨など断片的な言葉がきこえるのみ))
勇進会会員F「これシンチャン((区長の愛称))，これあれかい，風強かったらべつに一回ずつハマへつけてうとうてもかまんのやろ，まわらでも/: にー」
勇進会会員G「かぜつようてあんまり危ないからのう」
勇進会会員F「まあ今日一日南の風七メーターやけどの」
勇進会会員G「×××××」
勇進会会員F「まあ昼から飾り付けできるからよう」
会　　長「シショウのってなかったらようまあに一/: そこそこ行けるけどよ/: シショウう乗ったとなったら」
((以下聞き取り不可能な会話 28 秒))
会　　長「真剣に考えてよう/: 事故起こった場合にまあまた勇進会ばっかしあれやったら//こまるしのう」
勇進会会員F「最高責任者は区一やのに勇進会ばっかりもたされたらかなんわ」
勇進会会員G「区がやれ，区一が一」
勇進会会員F　((区長に))「そのまえによう最先寄ってにより/: やりゃいいけどようきのうもいちんちみえなんだやろー」
((沈黙 8 秒))
区　　長「どうするのや」
会　　長「どうするのやってこっちにふられてもいまもいうたとおりやわしらがどうこうよういわんことや×××」
区　　長」「ああ」
勇進会会員C「まあ昼までまってみんしや」
((35 秒聞き取り不可能))
勇進会会員C「11 時ごろもういっぺん寄って話し××××のう」
((こののち 11 時ごろもう一度集まる，という意見がオキットから 4 つほど出た後，会長，区長もそれに同意し，次第に解散))

〔1993年 7 月25日〕

× 印が多いのは同時に発言するものが多いため，当事者同士しかききとれないからである。オキットの会話にはこういったケースが極めて多い。

このテクストに表れているのはオキットとオカド，そして行政（区）側のせめぎあいである。実は評定自体の筋は，オキット側ではほぼ決まっていた。雨の降りしきる空と，テレビの天気図を見，さらには潮岬の観測所に電話を掛け，「相談に及ばんでえ」「くもりでどうするゆうんやったらのう」（延期した方がよい）という意見でほぼ一致していたのである。他方の区の側は，「天気の事は漁師のほうが詳しい」（ので意見を聞こう）といった極めて常識的なコンセンサスが取られていた[18]。またオキットは沖止めの関係上，祭りが終わるまでしごとはできないが青年会は仕事を休んで参加しているため，多少無理をしても早く行いたいのである。その点で区や青年会とオキット達とでは，評定に期するものが始めから

異なっていたといえる。区は素朴に天候条件を鑑みた成否をオキットに求めてきたのに対し，オキット達は最高責任者たる区長（祭典委員長）に決断を求めていたのである。どのような悪天候でも実行はできるが，それに付随するトラブルおよび費用の責任までは到底取れない，というわけだ。

更に，一度区が決断を出すつもりがないと分かると，オキット達は彼等本来の筋に沿って動き始めた。すなわち，延期という筋の実現である。しかし，この場合も誰がいいだすか特定できる訳でなく，様々なところからこの筋道を形成するのに貢献してゆくのである。

さて，この後，10時すぎから青空がのぞきはじめ，万一ザアブリ（俄雨）にあったときは使い物にならなくなった提灯などの費用を区がもつという条件をオキットが出し，区がそれを受けたため，11 時を待たずして「決行」という結論で二度めの評定は終了した[19]。因みに，前回の評定は，終始沈黙を守った先々代の区長が決断を示したことで，劇的に決定したという。

決定が出ると会館から会員がギョウカイ（御舟を繋いである船着き場下のモータープール，漁業組合の会館の下にあるためそうよばれる）に集まり，上，中，下それぞれの舟に飾り付けを行う。この際の飾り付けとはモチマエダケ[20]と呼ばれる竹のまわりに紙でできた様々な飾り（古座の幼稚園に授業の一貫として依頼するが，中でも最も重要な短冊だけは例年若い衆が作る。1994年は忘れたため無かったことが若干の論議を生んだ。）を七夕の笹飾りのように取り付けることと，舟の舷に沿った幕を張ること，幟を立てること，などである。

3. 入り舟式

区長以下，祭典委員，勇進会会長，青年会会長，漁業組合長らが古座神社でハライを終えるまでに会員はハッピに着替えて待機する。シショウ達も浴衣を着て御舟に乗り込んで待つ。午後 3 時，シャムショ（古座神社）から祭典委員が額を持ってギョウカイに着くと，額と祭典委員をのせた舟は法螺貝を鳴らし，太鼓を叩きながら上，下，中の順で岸を離れ[21]，河口付近にきたところで「出し」が歌われる。こののち古座橋のたもとでシショウと額がいちど降ろされ，シショウは解散となるが，祭典委員は橋を越えたところまで額を運んで，橋の下をくぐって陸につけられた御舟に再び乗せるのである。額と後に述べるショウロウは神聖なものなので，橋の下を潜らせるわけには行かない，と説明される。

船の中では，漕ぎ手は基本的に二人で，船外機の担当が一人であるが，この漕ぎ手が目まぐるしく交替する。およそ 5 分毎で交替するが，右と左が同時に交替するわけでもなく交替するきっかけもほとんど見られない。

途中二度ほどの坐礁を乗り越え（坐礁すると，船外機がかりと祭典委員を残して全員がロープで舟を引っ張る），川を上ってコッタマを拝み，再び太鼓と法螺貝を鳴らしてハマ（古田地区前にある「古田の河原」のこと）に着ける。松下（1992: 78）の議論を裏付けると，その儀礼はお神酒を 3 度どぼどぼと注ぎ，潮に浸した笹を 3 回振り，びちゃびちゃと潮の滴を振り掛けるのである。ハマにテントを張って作られた座の中で例によって宴が催されるが，そのときに供される刺身（鮪，鯵，イカなど）も，舟中で何時の間にか準備される。これで勇進会全体で行う 24 日の行事はすべて終了し，全員勇進会館にトラックで引き上げた。

4. 夜籠り

会全体で行う行事は終了したが，上，中，下の舟の行事はまだ残っている。オキットたちは一度家に帰り，腹拵えをした後，自分が乗っている舟の「夜籠り」に参加しなければならない。この際の漕ぎ手も決まってはおらず，現役，OB ともに来る者，来ない者のばらつきが見られ，舟によっては人手不足で苦しむことも希にあるが，「誰か来ている」から儀礼の執行に困難はきたさないという。「夜籠り」は，御舟歌を歌うシショウを乗せて，上，中，下，それぞれ順番にコッタマの回りを「右回りに」旋回する儀礼である。ながらく古座長を勤めた方森氏によれば，このような回転の方向は悲しみを表す。すでに触れたとおり，この際，シショウ達の歌う御舟歌は舟ごとに決まっており，上の船では「おやまくどき」，中では「あずま」下では「やしま」が歌われることになっている。天候による波の加減によっては，早々にハマにつけ，そのまま歌うこともあるという。昔はそのまま次の朝まで舟のなかで眠ったこともあるというが，いまではその儀礼がすむと，みな帰宅する。1991 年は，下，中，上の順に（毎年持ち回りである）回り，責任者以外は流れ解散となった。

5. 奉告祭ほか

26 日は奉告祭が行われる。区長，氏子総代，青年会会長，勇進会会長，網元の船頭，漁業組合長が参加した。「奉告祭は言わばこれから祭典を執り行なうと言った主旨の祝詞を奏上するだけの簡単なもの」（桜井 1982: 38）であり，奉告祭の後，ショウロウ（神のヨリシロ：オキットの子，奇数年の子供が選ばれる）[22]を背負って当舟にのせ，太鼓を叩きながら川を上る。ショウロウも，額と同様オキットたちにせおわれて橋を越える。この際の

背負い手も本来は上・中・下独自に一人ずつ選ばれるが，とくに寄って決めるのではなく，自然と決まるという。ショウロウを除く人々はコッタマを拝み，当舟がハマにつけられる。ハマには海側に向かった座が設けられており，ショウロウはその座に鎮座する[23]。勇進会のかかわる行事が暫くない間に，会員は御舟のモチマエダケを交換する。(1994 年には早朝 5 時には交換を始めていた。)

6. 御祭礼

各地区の古座区の祭檀に御幣が集められ，宮司が太鼓をうちならす。御祭礼の始まりである。祭典委員が額を持って祝詞をうけ，それぞれの舟に乗り込むと，法螺貝，太鼓の響きとともに岸を離れ，コッタマの回りをゆっくり回る。御祭礼の終わる太鼓が鳴るや，それぞれの御舟は岸に着けられる。「終わった」という声もちらほら聞かれる。

7. 青年会の獅子舞い奉納

それからは，会員は自分たちの家族の待つ屋形船で一時の休息をとるが，アミモトと会長は青年会の獅子舞い奉納を座の中で見届けなければならない。

獅子舞い奉納を見届けると，それぞれ座にもどって昼食をとる人々を尻目に御舟は「花回り」を行う。屋形船から笹につけて差し出された「花」を，会員が御舟から飛びこんで受けとるのである。古くは祝儀集めであったといわれ，あるインフォーマントによると古式泳法の披露の場であったそうであるが，いまやもっぱら誰が飛び込むか，という点に関心が注がれることもおおい。即ち，このとき誰が飛び込むかも予め決まっているわけではないのである[24]。

8. 川下り

さて，花回りを終えた会員は区の行っているカイ伝馬の競争に見入っているが，御舟の側を離れることはない。カイ伝馬が終了すると，川下りが始まるからである。このときは今はシショウも乗せず，テープで御舟歌を流しながら気楽に幕を上げたまま下ってゆく[25]。御舟が下り始めると，当舟，屋形船もそれに続き，ギョウカイ近辺の船着き場に戻る。

9. 川回り

日も暮れた頃に「川回り」と称する最後の儀礼が行われる。一度九龍島目指して外海に出た御舟は，ゆっくり旋回して河口に入り[26]，古座区の前の川をランプをつけてゆっくりと旋回し，御舟の姿を花火の光に照らす。この際，それぞれの舟はそれぞれのヤドの前で寄進のお礼に清めの潮をまく。この儀礼は今年も祭りが執行できた感謝の意を現している。河内祭りは終わったのである。

あとは明日の朝，(時間は決まっていないので 6 時から来るものも，7 時 30 分過ぎて現れるものもいる) 舟の片付けをするだけである。勇進会の会員は，ようやくゆっくり睡眠を取ることができる。

IV. 準備と儀礼：その作業手順

さて，われわれが今回抽出しようとしているオキットのエートスは，以上のような儀礼を進めていく過程を通じて共通する事ではあるが，より微視的にみてゆくために儀礼をその準備を合わせてテクストを交えてみてみよう。ここで取り上げるのは「歌合わせ」である。

1.「歌合わせ」の詳細

5 時に何の前触れも無く会員の一人が立上がり何人かが無言でそれに続く。上，中，それぞれの地域に前の日に移動しておいた提灯をヤドの内側に吊し，歌合わせの会場をツクルのである。提灯を吊すのは，ヤドを御舟に見立てるためであるという。

やがて 7 時が近くなると河内会の人々が三々五々集まってくる。1993 年の場合は，シショウが御舟歌を歌う間に飲む砂糖水 (バケツに水と大きな氷を入れ，砂糖をふりかけたもの，柄杓でコップにとりわけてのむ) をシショウが集まり出してから慌てて作り，他の二つのヤドに運んでいった。歌合わせは 7 時にはじまる，といっても必ずしも定刻どおりに始まるわけではないし，始める合図があるわけでもない。1991 年の場合は，7 時 10 分に法螺貝がふきならされ，タイコが鳴らされ，歌い始められたが，当時は法螺貝の練習か，と思ったほど開始の合図としての有徴性は感じられなかったうえ，(1993 年には下のヤドすなわち勇進会館では法螺貝がならされもしなかった。) 12 分にトイレからでてきた河内会会長[27]も加わり歌が揃い始める (開始時に会長はトイレにいた) など，ここにも誰がいなければ，あるいは誰かが始める合図をする，などという規範はないように思われた。1991年の調査に同行した共同調査者のフィールドノートには，次のように記述されている。

「7:00 ばらばらと人があつまってくる。氷水に砂糖をとかしこんだものをバケツからめいめいが飲んでいる。

7:05 9 人ばかりあつまったところでいきなり始まってしまう。〔…〕ばらばらと人はやってきては坐って，歌に加わる。途中，しゃべる人もいるし，あまり静粛なものではない。」[28]

更に歌っている最中も，暫く歌っていないものもあり，全員がいつも歌っていなければならないという訳で

もない。またシショウが歌っている最中も，勇進会の会員は別に神妙に聞き入るわけでもなく，大声で談笑しているのが常である。1993年の歌合わせの開始状況をテクストとして示す。

勇進会会員A「収入印紙だけすンませんけどお願いしときます，いそがしのにすまんのう，ほんまに//―」

勇進会会員B「×××//×」

勇進会会員A「勇進会××//××ガス代だしたるでー」

勇進会会員C「あすこがあい//たる，若い衆×××はいらんしよー」((入り口付近に顔を出した今年の新入会員2名に対して))

河内会会員A「ヤーソーレー//オー」((「出し」という舟が出て最初に歌う歌がはじまる，ソーからは他の会員多くが歌に参加))

勇進会会員A「すまんけどそこのペン取ってくらんしよ」

河内会会員「オー」((歌続くが勇進会会員の雑談も続く))

このテクストにも表れているように，注目すべきは，極めて騒然とした状況のまま，河内会の誰か（これは誰でもよく，役割が決まっているのではない。）が歌い出すということによって，歌合わせが始まっている，ということと，それによって勇進会の会員の会話がとぎれることはない，ということなのである。

歌合わせが始まって暫くすると，会館の奥ではシショウに供する刺身と酒の準備が始まるが，これも誰がやるか決まっているわけではないという。歌合わせが終わるとシショウに酒が配られ，刺身とダンゴの折りを肴にシショウ達は飲み始めるが，一杯飲んだ後直ぐ帰路に就くものもあり，儀礼的に行われるものである[29]。後に見る入舟式，夜籠り，などでも舟がオカに着いたのちこのような儀礼的宴がおこなわれる。

2.「歌合わせ」の分析

これら儀礼の細部を見てまず気付くことは，リハーサルであるとはいえ，（あるいは逆にリハーサルだからか）ここでの行いは本番の忠実なメタファー[30]である，ということである。提灯，法螺貝，砂糖水，刺身などのつまみを伴なう儀礼的宴など，細かい点までが実際の「夜籠り」「奉告祭」の細部を踏襲しているのである。

次に，このリハーサルにおいて出来，不出来が問われることはまずない。これは儀礼を通じてオキット全般にいえることではあるが，技量のよしあしが話題に上ることはまずないのである。その代わり，「気が回らん」ということばが仲間を非難するときによくもちいられる尺度であり，「気が回る」かどうかということがオキットにとって重要な評価の規準となっているようである。このこともオキットの理念より行為に対する偏向を物語っているように思われる。

最後に，ここでも一見すると皆が勝手なことをしているように見える点が指摘される。役割が分担されていないのである。皆がおなじことをしているわけではないという点では，オキットの分業は有機的連帯[31]であるようにみえるが，たんにそのモデルに当てはめる事のできない冗長性をもっているようにおもわれる。つまり，作業の筋道（plot）は皆が知っていても，誰がその役割を担っているか，という点については行為者が行為を遂行するまで誰にも分からないのである。たとえば，この歌合わせを例に取れば，A氏が「ヤー」と発声するまさにそのときまで，そこにいる全員はA氏が「歌合わせ」を始める役割をになうことになろうとは知らなかったのである。1991年，1993年，1994年いずれの場合にも，そうであった。評定を例にとっても，誰もが自身がオキットのプロットを自分が実現する決定的役割をになうとは考えていないのにも拘らず，誰もが，可能性としては担うことができるということは否定できない構造なのである。ある役割は常に別の担い手に置き換え可能なものでなのあり，その場の状況によって行為遂行的[32]に作り出されるものなのである。

V.「なぜ」の不在

さて，このような儀礼の次第の中で誰もが感じるのが「こうするのがあたりまえ」という姿勢と，それの裏返しである「解釈」の不在であろう。一部の河内会のOBを除くと，オキットは一般に「なぜ」という問いを発することはなく，河内祭の起源についても甚だ無関心である。「いろんな考えがあるねんてー」ということですべておさめてしまい，それ以上とやかくいうことはほとんどない。それに対して，「なぜ」とセットとなる「いかに」ということに関しては[33]，彼等はもはや，問いを発することが不可能なほど，詳しい知識を持っている。といって，それは別に何等かの個人的信仰に由来するのではない。そうする事が当たり前なだけである。一例を挙げよう。筆者は，祭礼の翌日「ザバライ」[34]の会場をツクルのに立ち会った。私はテーブルを運ぶようにいわれ，入り口に最も近い場所にそれを置こうとした。するとあるオキットは，「カミから置くんや，上から」という。とくに困っている風でもなく，私の無知を責めるふうでもない。野暮かとは思ったが，どうしてカミから置くのか

をきいてみると，「むかしからそうきまっとんねんて」と，それこそむかしからきまっているフィールドワーカーに対するあしらいの言葉が返ってきた。

つまり，オキットの作業手続きを見ていると，彼等にはプラクティスに関する知識はあってもその理由および動機づけに関する知識はほとんど全くといっていいほど欠落しているように見えるのである。オキットは儀礼全般を通じて，なにが行われるべきか，ということはよく知っており，それをその都度確認することもない。また，誰が，いつおこなうかという役割の問題についてははなはだ無関心で，同じ役目を何年も続けている例は方森功氏（通称イッサン）が 18 年以上潮くみをしているという例外があるのみである[35]。もちろん，当たり前のこととなっている作業手順は通常言語化されることはない。他の祭祀集団の集合場所にはあるタイムテーブルを必要としないのはこのためであるし，むしろ，正確には，まだ決まっていない部分が多いからでもある。オキットのプロットは，何を行うべきか，ということにのみ雄弁で，いつ，誰が，何のために，という点については，沈黙しがちなのである。誰かが行為をもって実現しない限り，それは誰にも予測できない点がある。

周知のように，ギルバート・ライル (1987: 23-78) は，「内容知」(knowing that) と，「方法知」(knowing how) との区分をおこなっている。前者は通常われわれが知識と呼んでいるような，明確な情報を含んでいるが，後者はむしろ技術，わざなどの行為がその行為の意図に先行している場合である。オキットたちの作業は極めて後者に偏っていると言えるだろう。

このことは近年の急激な状況変化によってより鮮明に見えるようになってきた。このプラクティスの自明性について，筆者の目撃した象徴的出来事を紹介する。1992年から，オカドが勇進会に入会することが認められるようになり，勇進会も人手不足のため比較的積極的にそれを受け入れている。その政策のあらわれか，1993年の祭典委員はすべてオカドが受け持っているが，そのうちの一人は，テッタンと呼ばれる名物男で，昨年たまたま花回りで好評を博した人であったために，会員の一人が冗談を言った。

(01) 会員 A 「テッタンことしもとびこむけえ」
(02) 祭典委員 B 「祭典委員もとびこんでええ//の？」
(03) 会員 C 他多数「いいわけないやろなにゆうとんや××」
(04) 会員 D 「もうかなんわー」

会員 A は冗談で言った ((01)) のであったが，それはオカドの B に素朴な疑問を生じさせた ((02))。しかしその疑問はオキットにとってはとうてい信じられない疑問だったのであった ((03, 04))。また，言葉を換えると，祭典委員 B は祭典委員でありながら，少なくとも飛び込むべきか，どうかという点について説明を受けていなかったということであり，これは裏返すと，オキットにとっては説明を要する事柄ではない，ということなのであった。オキットは，なにを行うべきか，というエスノメソッド[36]は知り尽くしており，それを言語化することがほとんどないためオカドは一瞬エスノメソッドを共有していないものとして戸惑うことになるのである。

VI. 結びに代えて

さらにオキットの作業手順の特徴としてもう一つ挙げられるのは，非常事態に備えられるようにであろうか，労働力を常に遊ばせておくシステムがあることである。このことは第一の誰もが作業の道筋を知っている，ということと密接にかかわっている。舟の中には常に一見何もしていない人が常に何人かおり，交替で船外機，櫓をうけ持っているが，一度トラブルが起こると，これらの余剰労働力が威力を発揮する。御舟が坐礁した際などは，ほとんどが舟外に出て，ロープで御舟を引っ張るのである。

さて，ここまで河内祭における古座のオキットの分業のいくつかのエートスについて素描してきた。これらのことが果たして祭礼以外のオキットの営みに現れているか語る資格を私は持たないが，河内祭の儀礼にあらわれた限りにおいてそれをまとめておきたい。

第一に，オキット達は作業の筋道，すなわち「方法知」は知り尽くしているが，それが当たり前であると考えているために，その筋道を言語化することはほとんどない。「内容知」には全く関心がないのである。それゆえ，第二に，筋道は共通の知識として共有されているが，その細部の役割については全く決まっていない。第三に，システムの中に絶えず，意識的にか，無意識的にか，臨時の時に備えて労働力のストックを蓄えている構造を有している，という点である。これを物理学的な用語を用いて譬えることが許されるとすれば，あるランダムなスカラー A—Z を想定した場合，ある任意のときに（もちろん行為者にとっては任意ではないかもしれないが）そのうちのどれかが向きを変えてベクトルとなるのを契機に（これは A—Z どれでもよい）ほかの一部（多くの場合全部ではない，あえて追随しないベクトルもあり，こ

れがストックされる）がそれに追随して方向を持ち，ベクトルとなることで結果的に一つの仕事が達成される状態であると表現することができるだろう。

最後に，オキットの非言語的コスモロジーおよびその表面化しない規範を我々にも若干分かるようなかたちで表しているとおもわれる私自身の怠慢に向けられたテクストを紹介する。

勇進会会員T「梅屋君，おまえよう，今回よう，風邪とか何とかゆうとったけどよう，出世しよおもたらすすんでしごとせなあかんでー/：よー」[37]

オキットのコスモロジーのなかには明確な「行うべきこと」は当たり前のこと，エスノメソッドとして刷り込まれているが，誰がそれをおこなうべきか，という発想は極めて薄い。プラクティスについては硬質な知識を蓄えているが，いつ，だれが，なんのために行おうとそれはどうでもよいのであり，イデオロギーには関心が薄い。行為者が東京からきた調査者であろうと，そのプロット自体は普遍であるかのような硬質性を有しているのであって，誰もがそれを行い得るし，そうしよう，と常に考えているはずなのである。このテクストに見るように，オキットの労働体系は実は分業などはしておらず，少なすぎる仕事の量に欲求不満を感じるほどの（「進んで仕事を」しようとする）労働力のストックをつねに保持しているのかもしれない。

彼等の行為の紡ぎ出す社会劇には，脚本はあっても，配役はない。どんな脇役であろうと，主役の分の脚本も覚えているものなのである。というのも，オキットの「物語」[38]には決まり切った筋があるが，そのキャスティングはといえば，役者それぞれがその都度判断し，冗長性をもって決めてゆくものだからである。

註

1) 本稿では，テープからそのまま文字化した資料をテクストと呼ぶ。鍵括弧（「　」）は単一の話者の発言の開始と終了を示し，/：は 1，2 秒の間を，//は別の話者による割り込み地点を，話者の音声の延長は—の記号，xxは同時に誰かが発話したため，聞き取り不可能な音声をしめす。必要と思われる筆者自身の解釈および状況説明は二重括弧にいれて示した。トランスクリプションに協力してくださった千原圏一氏に感謝する。

本稿で用いられた資料は，1991 年，1993 年，1994 年三度に渡る筆者自身の参与観察による調査と，1983 年から 1988 年まで実施された慶應義塾大学吉田禎吾研究会の資料，および，1989 年から 1994 年までの 5 回に渡る調査を実施した慶應義塾大学フォークロアクラブの資料を用いている。参加者諸氏に感謝したい。なおフォークロアクラブは 1994 年に『和歌山県東牟婁郡河内祭報告書』を作成している。本稿の骨子は 1993 年の調査の際，古座「神保館」において中西裕二氏，山田慎也氏とのディスカッションを通じて形成された。扱っているテーマは異なるものの，おそらくは同じ論理基盤に立つ山田（1994）をあわせて参照されたい。

2) 成員は，1991 年で 2 人，OB が 29 人であり，現在では漁師以外の若者の入会も認められている。

3) 類似した立場をとる論者として例えばベルマン (Bellman 1975)，ワーナーとシュープル (Werner & Schoepfle 1987) などがある。モアマン (Moerman 1988: 1) は，相互作用の過程の分析を欠いた社会理論は，いかに崇高で有用なものであろうとも，初めの決定的なところで間違っている，と述べる。会話分析が明らかにしたものの一つは日常生活の経験や相互作用を構成する際に有用な概念ほど当たり前と見做されるためにそれを共有しないものは，違和感の無視，問題の棚上げなどでその場を切り抜けている，ということである。浜本 (1983)，Zeitlyn (1990)，梅屋 (1994 a, b, n.d.) 参照。

4) オカドとオキットは，かつては道で遭うと必ず喧嘩になったという。青年会の獅子頭のはいった屋台がチョウケテ（ふざけて）勇進会館に乱入し，注連縄を切ったために喧嘩になり，勇進会の会員が屋台を放り投げて破壊するなどの事件もあった。近年は表向きは事件が起こっているということはないが，水面下での対立は根強い。なかには，オカドという言い方そのものに差別が含まれているといい，代わりにサラリーマンと呼ぶよう若い衆に指導する中堅会員もいるが，実際はオカドのほとんどは自営業である。

5) 入舟式に，檜天馬が御舟の前に出ることは決して許されない。青年会では，コッタマに向かう御舟を潮汲み場から途中まで見送る「御舟おくり」という儀礼がある。御舟が上らないことには祭りは始まらず，一度上ったら中止は許されない。このため，祭りの開始について勇進会は極めて特権的な位置にいることになる。

6) 古座区の青年会，勇進会のほか，高池下部の互盟社，古田の修養会などがある。また宇津木，月野瀬は「貰い祭り」と称して，比較的消極的な参加をしている（石橋・中西・中西 1988: 183-7）。高池上部は，河内祭り以前にすでに独自の祭りを終わらせているので参加しない。

7) それもおおくは酒の量で話題になるだけであり，どんな儀礼を行っているかはあまり知られてはいない。勇進会のあるインフォーマントによると，「ヤツラ（青年会員）は限度とゆうものをしらんねん」また，別の勇進会会員によれば，「互盟者は（酒量が）ゴッツイっちゃ」ということになる。

このように酒に対する態度や規範によっても，石橋・中西・中西 (ibid.) に論じられている集団それぞれの性格を素描することができる。ちなみに，勇進会自身に関しては，「常にはのまんけどよ，ザバライのときはゴッツウ飲むわ」，と言うことである。長時間かけてのむことを最も嫌い，多量の酒をいっぺんに飲むことが正しい飲む方とされている。よってオキットにとってオカドは最悪の酒ののみ方をしていることになる。

8) もっとも会長など重要な役職に就いているものに関してはこの限りではない。

9) シモヂ（下地）とよばれる古座区下町にあり，会長はここに詰めている。

10) 石橋・中西・中西 (1988: 170)。

11) あるインフォーマントによると，ヒガマエは本来一年だが，労働力の不足のためこのように分けているという。

12) 入舟式のとき歌われる「出し」「入舟のはうた」「こうてい」，御祭礼のときに歌われる「御曹子」，花回りのとき歌われる「花揃へ」，夜籠りで上，中，下の順でそれぞれ「おやまくどき」「あずま」「やしま」，川下りのとき，テープで流す「お伊勢参宮」（歌い手がほとんどいなくなったため），もう歌えるものの完全にいなくなってしまった「仏揃え」がある。歌詞は石上 (1982: 60-72) 参照。

13) おもに勇進会 OB で構成され，「御舟歌」の歌い手の集団。勇進会と河内会を混同している報告も散見されるが，まったくの別組織である。

14) 上は大川宅，中は岩見宅，下は，現在勇進会館である。かつては若者宿であった。

15) 任期は3年。1991 年には前地博夫，1992, 3, 4 年は宮本博生の各氏がつとめた。それ以前は橋野照生 (1983-5)，杉本武雄 (1986-8) がその任にあたっていた。橋野，杉本両氏は，現在は相談役のような立場で祭礼に参加している。

16) 1993 年には元区長の住吉氏，1994 年は古座川町長城氏から寄進として提供された。

17) 1994 年も台風のため評定が開かれた。1994 年一回目は評定に青年会会長の姿はなかった。他の地区は参加せず，ギョウカイに御舟が回されているか，ということで判断しているという。このため，自動車で確認に来る。

18) これはテクスト中にも現れているが，たとえば前日の調査によると，区長以外にも，教育長の山出泰助氏も同じ意見を示していた。一方勇進会が腰が重いのには幾つか理由がある。雨で破れた提灯などを調達する資金面の問題と，御舟は重心が高いため会長の記憶によれば過去二回ひっくり返っているという安全面の問題である。入舟式には高齢者も多いシショウが乗らねばならないため，波が高いときに行うのは危険であるとの判断がある。

19) ところが 1994 年評定ではまた経費の面でもめていた。

20) 長さのちょうどよい孟宗竹で，曲がっておらず，青々とした笹が多くついていることが条件である。また一年目の竹は曲がりやすいので駄目である。

21) この順番は毎年ローテーションされるという。とくに下の御舟が最初の時は「漁がいい」といわれる。1991 年は下・中・上，1992 年は中・上・下 1993 年は上・下・中，1994 年は下・中・上の順である。

22) 並木 (1982: 51) によると，昭和 56 年度は中出貴美，坂井 靖，杉本直史であった。真鍋 (n.d.) によれば，1991 年のショウロウは坂井里沙（6才），前地隆司（7才）（当時の勇進会会長のご子息である），川口射弘（7才）である。

23) ショウロウがコッタマに向かわず，むしろ弁天をまつる九龍島（くろじま）に面しているように思われる点についてはいくつかの議論があるが，これはむしろ南面の思想に関係しているように思われる。

24) 事実筆者も「いけえ」と突然いわれて飛び込んだ。フォークロアクラブの調査員も毎年泳げるかどうか確認の上，飛び込むのが習わしとなった。当初予定していなかった人が飛び込むところを楽しんでいる節がある。

25) 青年会の OB は，1994 年になって初めてテープであることを知り，「悲しい気持ちがした」と語っている。

26) 祭礼のはじめとおわりに同じ儀礼がある点は興味深い。

27) 石田欣明氏。

28) 真鍋 (n.d.)。

29) かつてはシショウの家一軒一軒まわってゼンザイを配ったそうである。

30) 人類学におけるメタファーは，あるものとあるものが類似に基づいて同一視されるいわゆる隠喩を指す。Leach (1976), Fernandez (1974) など参照。

31) デュルケム (1971)。

32) 事前に打ち合わせがあったわけではない，ということは確認を取った。そろそろ始めた方がよかろう，と思った，という。あるインフォーマントは，池の鯉のようなもの，とオキットの仕事の進め方を評して述べた。

33) 「なぜ」と「いかに」の区別は，近年医療人類学の分析概念として浸透している。ある病にかかったり，転んで怪我をしたりしたときに「いかに」その出来事がおこったかは説明できても，「なぜ」特定の個人に病や災いがふりかかるかはしばしば説明困難なものである。このような議論については浜本 (1989)，波平 (1984) など参照。

34) 座を殺うの意。儀礼がすべて終わった後に催される宴会。

35) これは，方森氏が潮汲み場のあるシモヂの若い衆であるためのようであるが，役としてきまってい

るわけではないという。

36) エスノメソッドの明確な定義はないが，それはおおよそ普遍的とおもわれるような定義を疑ってかかるべきエスノメソドロジーの理念を考えると当然である。ここではある集団で共有されている考え方の筋道，としておく。ガーフィンケル(1987: 11-8, Garfinkel 1967: 93-4) 参照。

37) すすんで働くことが出世につながる，という考え方は，漁師は親兄弟といえどもツキアイすなわち共同作業をすることがなければ関係を絶ってしまう傾向があることによっている。親族などよりむしろ舟単位で強い繋がりが生まれやすい。友人のことをカタブネという。一緒に組んで仕事をする舟の意味である。「いわれて仕事をするのは最低」だし，「仕事はおそわるものではなく盗むもの」であるという。山田 (1994) 参照。

38) リクール (Ricoeur 1987: 57-97)。

参照文献

Bellman, B. L. 1975 *Village of Curers and Assasins: On the Production of Fala Kpelle Cosmological Categories.* Mouton.

Davis, W. 1978 「阿尾，古座の祭り：和歌山県漁村の儀礼的特権」天野雅敏訳，『和歌山県の研究』第3巻，清文堂出版。

デュルケム 1971 『社会分業論』田原音和訳，青木書店。

Fernandez, J. 1974 "The Mission of Metaphor in Expressive Culture." *Current Anthropology*, 15(2).

Garfinkel, H. 1967 *Studies in Ethnomethodology.* Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

——— 1987 「エスノメソドロジー命名の由来」山田富秋，好井裕明，山崎敬一編訳『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房。11-8。

浜本　満 1983 「卜占 (divination) と解釈」『儀礼と象徴：文化人類学的考察』(吉田禎吾教授還暦記念論文集) 九州大学出版会，pp. 21-46。

——— 1989 「不幸の出来事：不幸の語りによる『原因』と『非・原因』」，吉田禎吾編『異文化の解読』平河出版，pp. 56-92。

石橋・中西・中西 1988 「祭礼の重層的構成：和歌山県東牟婁郡古座，河内祭の事例より」吉田禎吾，宮家準編著『コスモスと社会：宗教人類学の諸相』

石上七鞘 1982 「御舟歌と獅子舞い」桜井 (1982) pp. 60-80。

Leach, E. 1976 *Culture and Communication: The Logic by Which Symbols are Connected.* Cambridge University Press.

真鍋桃子 n.d. 「古座日記 1991」未刊。慶應義塾大学フォークロアクラブ『和歌山県東牟婁郡河内祭報告書』(非売品) に「〈勇進会〉フィールドノートより」として採録。古座区教育委員会蔵。

松下千恵 1992 「紀ノ国だより：〈河内祭〉古座の盛夏」『季刊自然と文化』37，日本ナショナルトラスト，pp. 76-82.

Moerman, M. 1988 *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis.* University of Pennsylvania Press.

中西紹一 1987 「漁村の社会構造に関する一考察」早稲田大学大学院文学研究科 1986 年度修士論文。

波平恵美子 1984 『病気と治療の文化人類学』海鳴社。

並木宏衛 1982 「祭りの組織と敷設」桜井 (1982) 所収。

Ricoeur, P. 1987 『時間と物語 I』久米　博訳，新曜社。

ライル，G. 1987 『心の概念』坂本百大他訳，みすず書房。

桜井　満 1982 『和歌山県，古座の河内祭：古典と民俗叢書VI』白帝社。

梅屋　潔 1994a 「『化かされる』という経験 (こと)：あるいは人類学的実践についての覚書き」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第38号 pp. 81-92。

——— 1994b 「邪まな祈り：新潟県佐渡島における呪詛」『民族学研究』59(1), pp. 54-65。

——— n.d. a. 「『象徴』概念は『合理的』に埋葬されうるか：新潟県佐渡島の貉 (むじな) 信仰から」未刊。

——— n.d. b. 「呪術の合理性：『一見して非合理な信念』はいかに合理化されるか」未刊。

Werner & Schoepfle 1987 *Systematic Fieldwork.* vol. 1. (Foundations of Ethnography and Interviewing), Sage.

山田慎也 1994 「葬制の変化に関する一考察：和歌山県東牟婁郡古座町の事例を通して」慶應義塾大学大学院社会学研究科 1993 年度修士論文。

Zeitlyn, D. 1990 "Professor Garfinkel visits the Soothsayers: Ethnomethodology and Mambila Divination." *Man* (n.S.) 25, pp. 654-66.